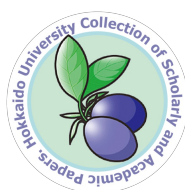




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道におけるフットパス活動
Author(s)	小川, 浩一郎
Relation	歩く滞在交流型観光の新展開 The New Development through Extended Stay and Interactions with Locals in Walking Tourism
Citation	CATS 叢書, 12, 125-144
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73757
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS12_12.pdf



北海道におけるフットパス活動

小川 浩一郎

株式会社ジオ／北海道科学大学客員准教授

よろしくお願いいたします。株式会社ジオの小川浩一郎と申します。また北海道科学大学でもフットパス専門で客員として所属しております。あとは北海道の中でフットパス先進的や古くからやっている人たちと一緒にフットパス・ネットワーク北海道 (FNH) という組織もやっています。

元々はエコ・ネットワークという環境市民団体で、父が本日お越しの神谷さんとほぼ同時期からフットパスをやり始めて、四半世紀ほど前から普及や歩く活動に関わってきました。その中でいろいろフットパスを作ったり歩いたり、広めたり、フットパスの何でも屋みたいなことや一般市民の方々とフットパスなど歩く道を歩きに行ったり、ご案内をしたりといった旅行業を取得し、法人化いたしました。

先ほど神谷さんのお話の中で、いろいろとフットパスはこういうものというのがありました。同時多発的に一緒にやりましょう、と 25 年ほど前に始まったわけではないので、同じフットパスといっても土壌が違うし、先ほどの赤道の話も北海道ではほとんど知られていないため、多少食い違う部分もあるかもしれませんが進めさせていただきます。

北海道のフットパスは約 25 年前に始まりました。父である小川巖が「フットパスは北海道によく似合うのではないかとイギリスから取り入れました。この頃、僕はまだ中学生だったので関わってはいませんが、まずは一番重要なフットパスを楽しめる、歩くことを楽しめる人たちを増やさないかどうしようもないと始まった訳です。英国のツアーを歩いて楽しむとか、札幌市内でフットパスが無くてもイベントや講座などを通じて「歩くことを楽しむ」フットパスを体感してもらうというものです。平行してフットパスの普及のため講演会やフォーラム開催などもいろいろ行ってきました。

当時僕らも知らなかったのですが、新得町で竹田英一さんという方がペンションと羊牧場を営みながら 1992、3 年くらいにフットパスを作っていました。一昨年にお亡くなりになりましたがこの方もフットパスの生みの親と言っても過言ではないです。英国式のフットパス初めて日本で作られた方です。写真は遠いですが、羊牧場の中を歩いて行けるところが北海道にはあります。奥に見えるのがペンションでこのような景観の中を歩いたりします。ルートは羊牧場、廃線跡、町有林内とかフットパスの王道な場所を設定しています。今、旧狩勝線フットパスとしてトンネルは通れませんが、廃線跡を利用して馬も通れるブライドル・ウェイとしても機能しています。周辺のフットパスやロングトレイル、トレイルランも盛んに行われており、今はかなりトレイルランニングの方に比重を置いて進められてい

るそうです。イギリスにあるようなスタイル（敷地と敷地を越える板など）もちゃんと英国らしく作っているところでもあります。本当にフットパス黎明期を支えられたすごい方だったんですが、亡くなられてしまったので、是非こういう場で知っていただければとご紹介させていただきました。

僕は 4 つの大きな柱をテーマにフットパスの普及・設置、歩く文化の拡散などを進めてきました。ひとつずつご紹介します。

まず、歩くことを楽しめるイベントです。自然観察やバードウォッチングなどのガイドウォークや観察会とは異なり、「歩くことを楽しめる人たちを増やす」ことが出来なければフットパスの未来はないだろうと父は考えていたようです。例えば公園内だけのクローズドなものではなく、つながっている道を楽しみましょうということを 90 年代の初めから講座やイベントなどで始めました。道新文化センターが主宰している「エコ・ウォーキング(2019 年から「フットパス・ウォーキング」に名称変更)」という講座を開いて、毎年、春と秋と冬にフットパスイベントを行っています。冬はかんじきやスノーシューを履きながら歩きます。そういった講座を開催して今までに約 10 万人の方にご参加いただいている、今でも続く講座です。

他にもエコ・ネットワーク独自で札幌市内だけではなく、札幌市外も歩きたいという声が多かったので、魅力的なルートをこちらでつなげて歩いたりもしました。こちらがエコ・ウォーキングの風景です。大倉山のすぐそばに荒井山という小さな山があつて、ここにもジャンプ台があり、市内を一望できるルートを設定して歩いたり、また札幌市北区（一部東区）にある太平百合が原地区には「太平百合が原フットパス」というフットパスが 6 コースありますので、そこで開催したりもしています。

ふたつ目はフットパスづくりです。2000 年代に入ると北海道内にもフットパスが増えてきました。小川巖が付き合いのあつた町村の関係者にフットパス設置を勧めてきており、気がついたらフットパスをやっているところが一定数出来ていました。

えりも町の場合は「山道」と書いて「さんどう」と読みます。歴史の道で、詳しく説明すると長くなるので割愛しますが、古くからの道を復元する作業のお手伝いをしました。エコ・ネットワークの会員連れて地域の中に入り、地元の方々と協働して復元作業を行います。FNH の会長の住まいである白老町にはサケが遡上を間近で見られる有名な川があります。周辺には牧場や整備された森林などもありますので、それらをつないだフットパスを地元住民、町内外の関係者と設置したりもしました。神谷さんのお話にも出てきましたが、黒松内では町民で「フットパスボランティア」を作り、行政が黒子役で陰から支え、町民を主役に据えるスタイル、これを「黒松内スタイル」と呼んでいるのですが、このような形でフットパスが出来たりしました。

前述の地域は我々も直接関わってきましたが、有名な根室のフットパスも同時多発的にこの時期にできています。ここの設置には僕は直接かかわっていませんが。後は旭川市の小野塚さんが経営されるクラークホースガーデンというブライドル・ウェイや私たちは訪

れたことがなく既に無くなってしまっているようですが清里町などが実は90年代後半から2000年代前半にかけて多く作られるようになりました。

三つ目です。フットパスを知ってもらおうということもとても重要です。フットパスが一定数出来たところで2002年に（公財）北海道新聞野生生物基金が主催となり、フットパスのフォーラムを開催することになりました。おそらく日本で初めてのフットパスに特化したフォーラムだったと思います。ちょうどこの時期に私はエコ・ネットワークで働き始めました。当時の盛り上がりは本当にすごかったのを覚えています。申込数は200名でしたので、100名ほど申し込みがあれば御の字と主催者も我々も考えていましたが、蓋を開けてみると350人ほどが来場しました。会場に入りきらず、立ち見が出たほどで熱気に溢れていました。これだけ「歩くことを楽しみたい」という人がいるのだと再確認できたフォーラムでした。この年が北海道のフットパス元年と我々は呼んでいます。野生生物基金が発行する季刊誌「モーリー」7号の特集にもなりました。

この盛り上がりを受け翌2003年から毎年ほぼ2回のペースで「全道フットパスの集い」というフットパスの集まりを開催することになりました。この集いも北海道内フットパスが広まっていく要員のひとつにもなっています。フットパスを持つ地域が持ち回りで行っていき、6月にはえりも町、9月には恵庭市（北海道胆振東部地震のため中止）でも開催が決まっています、今年の秋で28回目になり、来年は小樽と稚内といった具合に開催希望の地域が後を絶たない状態になっています。内容は2日間の開催で両日に開催地域のフットパスを歩きます。初日のウォーク後に「歩く」ことに関する講師をお呼びして、講演会や各地のフットパスの報告会を行います。その後には地域の食材やお酒を食べたり、地域の出し物などを観覧したりする交流会が開かれます。この交流会が重要でフットパスはかなり広い業種や分野の方たちが集まりますので、様々な交流につながるのです。開催地のキャパシティにも寄りますが、少なくとも100名強から多いところでは400名ほどが参加するそこそこの規模を誇るイベントになっています。もちろん参加者は歩くことでじっくりと地域を知ることができますので、よい体験ができればリピーターや紹介にどんどんつながります。こちらの写真は昨年秋に開催したニセコでの集い交流会の風景です。「食」にかなりこだわって作っており、地元ならではの美味しいものを存分にいただきました。

2006年には神谷さんが発起人といった形で日本全国のフットパスフォーラムが山形県長井市で開催されました。これを受け、2008年に日本各地や英国からもお呼びしてフットパス国際フォーラムを黒松内町で行い、東京の神谷さんや山梨県甲州市の中村さん、根室の伊藤さん、地元黒松内の新川さん、英国のランブラーズ協会のマイク・ミルズさんが登壇され、コーディネーターはエコ・ネットワークの小川巖が務め、活発な議論が交わされました。ちょうどこの頃に北海道で爆発的にフットパスが増えている時期でした。

こちらの写真は2014年に日本フットパス協会の全国大会が上富良野町で行われた時のものです。北海道民は飽きっぽいと言われることがありますが、現在まで四半世紀にわたりフットパス活動が続いているのはフットパスに無限の可能性のあることはもちろん、道内

のフットパス関係者の多くが実際にイギリスのフットパスを歩いて、本場のフットパスを体感しているからというのも大きなウェイトを占めていると思います。この点は北海道外のフットパスとは異なる点ではないかと思っています。

この本場イギリスに実際に歩きに行く、というのが四つ目になります。1990 年前半から後半にかけて英国のナショナルトラストを巡るツアーというのに小川巖がナショナルトラストの講師として同行することが何度もありました。その中でフットパスを歩くという内容も入れて催行していたのですが、道内在住の敏感な層には少しずつフットパスが知られていき、北海道によく似あうという理解も広まっていきました。例えば湖水地方のピーター・ラビットやビアトリクス・ポターなどに合せてフットパスに触れてもらうということです。

10 年も経つとフットパスを大きなテーマとして行きたいという声が大きくなり、これがエコ・ネットワークで今でも続く「英国フットパスを歩く」シリーズになりました。そこには北海道で古くからフットパス活動を行っていたり、これから始めたい方など多くの関係者も参加されています。そして英国で体感したフットパスを北海道のフットパスヘフィールドバックしているということです。それらがあるので実際に「歩く文化」を肌で感じている部分は北海道のフットパスの強みではないかと考えています。

2011 年から韓国のオルレやドイツ・ポルトガルの「巡礼の道」なども歩きに行き、様々なタイプの歩く道があることを広く知ってもらう機会にしています。オルレには来月も行きますが、8 回目にしてようやく一周できるところまで来ました。こちらは英国ヨークシャー地方、そしてこちらがスペインの巡礼の道「フランス人の道」の写真です。

北海道のフットパスの広がりですが、90 年代から 2004 年くらいまでは本当に少しずつ増えていきました。この時期はエコ・ネットワークもしっかりと関わりながらできて、今でも続いているフットパスが多いです。しかし 2005 年から 2009 年くらいは拡散期でかなりバタバタと各地にフットパスが作られるようになりました。現在は増え方は緩やかになりましたが、今までのいい面、悪い面を取り入れながらしっかりと活動が出来ている地域が多いです。

新得フットパスの竹田さんが話してくれましたが、バブルが崩壊して人々の心にぽっかり穴が空いたところに「歩く」や「ゆつくり」というのが入り込んできたのではないかと。これを見ると本当にその通りだと思います。IT バブルの後にも一時期フットパスを作ろうという動きが高まっていたし、リーマンショックの後にもありました。そういった人々の思考や感情は多少関係していると考えています。オリンピックの後もしかしたら活発になるかも知れません。

現在、北海道では図の色がついている地域にフットパスがあります。しかしすでにこの中ですでに数カ所はフットパスとして機能していないところがあります。緑色の地域は FNH に加盟しています。加盟は 19 地域、21 団体に参加してもらっています。第 1 回全道フットパスの集いの際に全道フットパス・ネットワーク準備会を立ち上げ、現在よりも緩いつな

がりを持っていましたが、色々な広がりやフットパスと呼べないようなものまでフットパスになってしまい、これではフットパスの悪い面が目立ち始めてしまうと考え、少し進化する形でFNHに名称変更してフットパスの進展に携わっていかねばと考えています。会長はいますが、縦のつながりよりも横のつながりを意識し、情報共有やカントリーコードやコースサインの統一、コースの質の維持などを年に1回幹事会を開いて話し合っています。ウォーカー向けに情報提供やホームページでの告知なども行っています。

先ほど廣川さんからご質問があつて、神谷さんがお答えしていました「認証」についてですが、我々もその部分が一番困っています。せっかくフットパスを歩いてもらって「なんだぜんぜん楽しくなかったよ」って思われて本当のいいフットパスを歩いてもらえないのは関わっている者として一番悔しいです。私たちも認証や認定などはしたくありません。可能であればしっかりとしたフットパス活動としているフットパスにFNHに加入してもらうのがベストだと考えます。そして上下関係を作らない範囲で推奨や保証のような役割を果たせればいいのではないかとFNHでは考えています。全道フットパスの集いもFNHに加盟してもらって開催できるという形にしています。

FNHではコースサインも統一したものを使用しています。現在約20市町村で貼付しています。少なくとも旧バージョンも含め、このコースサインがある地域ではカントリーコードや問い合わせ先、マップがあるなど最低限問題なく歩けるようなところにしていきます。

写真のコースサインは北海道科学大学の学生が2016年にデザインしたものです。旧バージョンもあるのですが、太陽光による色落ちが早すぎて、酷いところだと1週間くらいで見えなくなっていました。なんとか改良しなくては考え、絶対に色落ちしない新素材を採用しました。この写真はニセコ町で撮影されたもので新コースサインを使っています。しかしコースサインは古くからフットパスがある地域では独自のものもある場合があります。少しでもいいからFNHの統一コースサインを貼ってくれるようお願いしています。

我々は「ノーザントレイル構想」というのを掲げながら今までやって来ました。まず第一、二段階は市町村にひとつあるいは複数のフットパスを作ります。先ほど神谷さんではできればサーキュラー（周回）のフットパスの方がいいのではないかと、というお話をされていましたが、私が北海道でお話しする際は少なくともサーキュラー（周回）とワンウェイ（一本道）が1つずつあるといいとお伝えして、実践してもらっています。それはサーキュラー（周回）ですどうしても先へのつながりが乏しくなる場合があるからです。ワンウェイ（一本道）を作るとさらに先の町、さらに先の町へつながり、長距離フットパス化になる可能性が出て来ますので、2種類のルートを作ってもらうよう提案しています。

第三、四、五段階は隣接している自治体や振興局単位をつなげます。例えば石狩振興局と後志振興局、石狩振興局と空知振興局などを我々のイベントで既存のフットパスと適地をつなげて実施しています。振興局で今一番活発なのは根室振興局です。旧標津線という廃線跡を使って、一部を除きつながっています。旧標津線フットパスが動脈なり、毛細血管みた

いに他の市町のフットパスがつながっています。

現在は次の第六段階の北海道内をつなぐ段階に来ているのではないのでしょうか。最終段階は海を越えるしかありません。例えば函館まで歩いてその後、青森からのみちのく潮風トレイルを種差海岸から歩くような形にしたり、我々が5年前に実施しているのが、ロシアのサハリンへ渡るルートです。稚内の人たちはかなりやる気なのです。海と陸をつなげるのは物理的に不可能な部分もありますが、将来的にはつながるのではないのでしょうか。

ロングトレイルやオルレ、他の散歩道などもそうでしょうが、フットパスは可能性を無限に持つことができます。一番わかりやすいのはフラワー、バードウォッチングをしながら、歴史探索しながらなどです。他にも例えばゴミ歩きフットパスやロング（長距離）フットパス、癒やしの森フットパス、サーモンフットパス、廃線フットパス、環境ボランティアを絡めたフットパスなど実際に実施したり、すぐに思い当たるものでもこれほどの多様性を持つことができます。個人的にやっているのは友人家族とラーメンパスという札幌の美味しいラーメン屋を巡るようなフットパスです。

我々は25年以上フットパス活動を札幌市内で行っています。そのルートをつなげ札幌市内約150kmになる「さっぽろ周回ウォークウェイ」というロング（長距離）フットパスも実施しています。こちらの地図を見ると国道や交通量の多い道ばかり通るのではないかとと思われるかもしれませんが。しかし8~9割はそういうところを外して、うまく園路や沿道、河川敷、踏み分け道などフットパスらしい「歩くことを楽しめる道」をうまく利用、つなげてイベントを実施しています。一区間は約6kmから一番長いところでは約16kmになりますが、約10km前後で作ってしまして、地下鉄やJRの駅や少なくともバス停を始終点にするようにしています。

「さっぽろ周回ウォークウェイ」に関わらずアーバン（都市部の）・フットパスはよいところがたくさんあります。まずは公園なども多いので、トイレがたくさんあります。次に飲食店です。前述したラーメンパスのように美味しくて、いいお店がたくさんあります。さらに体に異変があったときにはタクシーを呼んだらすぐ来てくれますし、エスケープしやすいというのも魅力的です。明日はせっかく神谷さんが東京からきていただいているので「フォーラム『札幌にもフットパスを！』」というフォーラムを開催します。4年前から札幌市内で始めて、アーバン・フットパスについてアプローチするフォーラムです。このさっぽろ周回ウォークウェイのイベントは年に夏と秋に2回ずつ行って、1日では歩けないですから4、5回に分けて開催しています。

癒やしの森というのは身障者の方々と一緒になって、車いすで通れるフットパスを作ったりしています。「この実会」や個人が所有している土地や山を借りてこういった活動もしています。ヨーロッパでは割と行われているようですが、森林療法みたいなものがあります。精神的には薬よりも森の中歩くのが一番いいなどと言われているそうです。こういった話をうけて札幌の身障者の方もフットパスを利用できたよいのではないかということで行っています。ここで切った木のチップをほかのフットパスのルートに使うとか副産物も出て

来て、一石二鳥にも三鳥にもなっています。

一昨年からはワイルドサーモンフットパスというのも開催しています。札幌にはいろんな河川がありますが、実はサケがたくさん遡上しているというのは意外と札幌市民は知りません。観光面でもそこまで全面的に押し出しているわけではない。左の写真の川は多い時には川いっぱいにはサクラマスの上姿を見られます。ただ去年は全国的にも言われていた通りサケの量が非常に少なかったのですが、この場所は豊平区の住宅街のど真ん中です。しかしそういうサケは養殖されたサケが多いのです。そこで「札幌ワイルドサーモンプロジェクト (SWSP)」というところと連携して行いました。養殖の作業も重要ですが、野生のサケが多く回帰するようにしなくてはならないのです。SWSP では豊平川の底をコンクリートから土に変えたり、市へ提言して河川工事の際に業者に協力してもらったりと様々な活動をしています。市中心部の千歳鶴の工場はなぜあのような場所にあるのか？それは工場すぐそばの豊平川の部分で湧水が湧き出ているからです。酒とサケもつながる文化があるなどおもしろい部分もたくさんあるのです。それが札幌の地形の歴史などともつながりフットパスをツールに様々な分野へ広げることができます。フットパスを活用してこのような活動も行っています。

もちろん全国的にもおこなっているでしょうが、北海道では歩くことプラスアルファでつながることを行っています。例えば一番わかりやすいのが食べ物だと思います。南幌町の場合はフットパスを歩いた後に、右の写真のようにキャベツキムチづくり体験を行うことがあります。あの町はキャベツの生産量日本一になったこともあるので、キャベツを町おこしに考えていた時期がありました。そこで北海道フードマイスターであった村松さんが韓国に渡って南幌のキャベツと合う食材をご自身で厳選して試行錯誤の末に形になりました。この方は今は道内でも有名になった「なんぼろジンギスカン」の生みの親でもあります。南幌町は長沼町の隣です。長沼町のジンギスカンは古くから有名でしたが、南幌の人に言わせると「長沼ジンギスカンは俺たちが味を教えてやったんだ」と。長沼の人たちは「南幌はマネをした」って言うておられ、お隣同士ジンギスカンへの思いは強いのです。採れたての野菜も収穫させてもらって、その場で食べたりなどもします。

下の写真は北海道のフットパスイベントの際に出店する移動パブです。食べるというのは本当に重要な要素です。帯広の方が出展されているのですが、かなりこだわって食材や飲み物を提供してくれます。2、3日前に開催する現地に入り、自分で美味しいものを厳選し、地域の採れたてや美味しい地場の加工品を出します。そうすることでイベントに参加した人の購入にもつながっていきます。パンはご自身の最良にしているパンしか使いませんが、ビールはつぎ方がよく美味しくいただけます。イギリスでもそうですが、ビールとフットパスは非常に相性が良いと思います。

次は買うということです。左の写真ですが、実はこの後ろにまだ何十人も待っているんです。黒松内の千葉農場です。ここで採れたての野菜を販売してもらおうのですが、この日も10万円近い売上になったのではないのでしょうか。小遣い稼ぎとしてはいいものになります。し

かも農家の人達の食べる畑から採れた野菜なので農薬もかかっていないですし、とても美味しいです。右の写真はルート途中では無料で配布します。そしてゴールに着くと周辺には先ほど配布された食べ物や加工品の販売店が点在しています。そうすると美味しかったら皆さん購入していきます。

「食べる」「買う」ときましましたので、次に僕らがやり始めたのは「地域産を育てる」ことです。環境関係に強いエコ・ネットワークの方で深く関わっています。左の写真は南幌町ですが、フットパスでいつもお世話になっている農家で無農薬、有機の田植えを手伝ったり、除草作業をしたりして秋の収穫の時期にはフットパスを歩いてこの農家さんから手伝った分だけお米を分けてもらっています。右の写真は余市町です。無農薬や有機の食材がなぜ価格が高いのかというのは頭では理解しているのですが、実際に体験してみると身をもって体験できます。ここでは果樹を無農薬で栽培しているという非常に大変な作業をしているので、摘果や除草、その他農園周辺の作業を行っています。

分かりやすい例ふたつ目は歴史や文化を組み込むことです。えりも町には江戸時代に作られた猿留山道がありますが、国道が出来てからは使われなくなって、ほぼ消滅していました。これを地域の関係者や住民、都市部の市民とともに復元作業を10年ほど行い完成させました。地域の歴史や文化に触れられる上に滞在期間も長くなりますので、より深く地域を知ることができます。

最近特に注目しているのは都市部の歴史や文化を組み合わせ、それを体感してもらうというものです。札幌市北区には「あいの里」という地域があるのですが、この「あい」は藍染めの「藍」です。開拓時代に徳島県からの入植者が多かったらしく、故郷でも行っていた藍の栽培や染め物を始めたようです。しかし本場からすると北海道で作った藍ということで見向きもされませんでした。しかしこのあいの里の藍染めが日本一になってしまったそうです。このまましっかりこの地域で根付いていくのかと思いきや、すぐにインドから安いインディゴが輸入されるようになり、長い歴史がなかった分急速に廃れていったと聞いています。しかし現在でも脈々と受け継がれておりまして、地域で愛栽培も行い、サークルも複数あるそうです。こういったものを当時の場所を歩きながら感じてもらい、実際に作ってもらっています。右の写真は篠路の子供歌舞伎です。僕もまだ見たことがないのですが、こういったものも何かの折に取り入れられるといいのではないのでしょうか。

当社は旅行業を取得していますが、フットパスを活かして長期滞在につながるウォークツーリズムを創出していきたいと考えています。実際、FNHの仲間でも富良野地域や十勝、根室地域でフットパスを長距離化した長距離フットパスを活用しています。

こちらの図はエコ・ネットワークの小川巖が作ったものです。単純計算になりますが、短い時間にたくさんの人に来てもらうのと長い時間、歩く速度でゆっくりと楽しんでもらうことでこれだけの数値の違いが出て来るのです。たくさんの人をどぼっとというのは当社やエコ・ネットワークで出来ることではないので、我々はゆっくり、少しでもしっかり地域を体感してもらい、いいところを知ってもらえるようということを心がけています。

まとめになります。フットパスをツールにすることで他分野や多種多様な人、職種の人達とつながることができます。もちろん地域通しや地域と人のつながりも深くなります。テレビではないですが4K時代に突入したという話をよくします。Kがつくなら何でもいいとは思いますが、「環境」「観光」「健康」「活性化」です。そして歩く人、創る人、関わる人誰もがWin-Winの関係になります。しかしこのフットパスで生活ができる人は一部しかいないのが現状です。また現在、北海道のフットパスはそれなりに長い期間活動していますが、経済的に厳しい部分があるということでキーマンの人達の高齢化がどんどん進んでいます。これが進むと無くなってしまうこともあり得るのです。また今回のような研究会を機会にいろいろな「歩く道」に携わっている方々と活発に交流を図って「歩く文化」を定着させていきたいと思いながら今回の研究会に参加させていただきました。それらが糧となり、次世代や世代間もつながるフットパスになればと思い、私の発表は終わらせていただきます。ありがとうございました。

<<質疑応答>>

内田晃

北九州市立大学の内田でございます。たびたびうちの大学からコメントさせていただき恐縮です。

小川さんたちの取り組みは私たちも大変参考にさせていただいております、これまでに私も北海道の色々なところを歩かせていただきました。北海道に来ると、大自然に圧倒的に驚かされて、そこを歩くというのは本当に非日常的な光景を見ることができます。いつも我々にとっては刺激的なフットパスをさせていただいております。

小川さんたちがすごいと思うのは、全道フットパスの集いを毎年2回開催されておられて、それに歩きに行く固定のウォーカーの人たちがいらっしゃいます。海外もスペインやイギリスとかいろいろ行かれているみたいですが、歩くことが本当に好きで、イベントにみんな集まって北海道の色々なところを歩いているのはすごくいいないつも感じておりました。

私も先週、奥尻島に別の用事があって行ったのですが、なんとフットパスがあるということで、大変驚いて冬、寒い時期だったのですが、歩いてみました。ただ、恐らく役場の担当者が代わっていたり、コースはコンサルタントが作られていたというふうに聞いていますが、コンサルがいなくなったりすると継続的にフットパスコースを維持するのはなかなか難しいのかなと感じました。地図には看板があると描いてあるのですが、歩いてみると全くなかったりしました。どこで曲がればいいのかちょっと分からなかったこともありました。先ほどの話の中にもありましたが、やっぱりいいフットパスを担保していくことは、本当に難しいのだと感じました。

九州では、いかに地域の人を育てるのが大事なのかなという風に考えて活動をしていま

す。それはフットパスの推進者という意味ではなくてむしろ、普通に歩きに来る人だったり住民であったり。福岡県中間市で、学生と一緒にコースづくりをずっとやって来たのですが、看板とか方向を示す道標を立てるときにやっぱり市は一番立てやすいところあるいは、貼りやすいところに立てようとしています。市が持っている道路標識や柵が付けやすいのです。ところが逆で実は私有地に付けるのが一番いいのではないかと考えています。なぜかという、私有地だと住人の方が常に見てくれる。もし、何か看板が倒れていたりしたらすぐに気がつく。そういう意味で住民の方を如何に巻き込んでいくかが大事なのかなと考えております。私ども九州では熊本県美里町が中心でやっていますが、「フットパス大学」という講座を定期的に開催しておりまして、地域でフットパスを推進する人を育てていくような、そういった人材育成に取り組んでいます。最初は初級を取って、地域でフットパスづくりをやって、その次のステップとして中級・上級といったことをやっています。

ただ、我々もどちらかという推進者の人たちを盛り上げていくのは色々なところでやっていますが、小川さんたちがやられているような、歩きに来る人たちの考えをどうこのフットパスを維持するためにフィードバックさせていくかが非常に重要になっているんじゃないかなと思います。そこがまだ、我々もなかなかやれてないところなのかなと思って、小川さんたちは歩く人、ウォーカーをかなり囲い込みをされていて、この人たちをどうフットパスづくりに活かしていくかということについて少しコメントをいただければと思います。

小川浩一郎

今、実はエコ・ネットワークのほうで会員制にしてやっていて、だいた 350 人くらいの方で、本当にみなさん歩くことが好きな方たちなんです。やっぱり最初は苦戦したようです。僕はいなかったのだからわかりませんが。歩くことっていっても紹介が足りない。ガイドが少ないんじゃないかというのがあった。でもそこを乗り越えて歩く講座が始まる前に、フットパスはこういった歩きになりますと一方的になりますがご説明したり、そういう機会があったとは聞いています。ただ、その中でも来てくれるようになると、けっこう口コミで広めてくれる。ですからうちの会員じゃなくても、参加してくれる人はたくさんいる。潜在的な会員数というのは 3~4 倍になるのではないかな。

そういった人たちと、僕らは作るということに協力することをやっているんで、現地に入ったときにモニターウォークをしましょう、ということで研究者の方たちとか、あるいは、観光の方とか実は会員の中にはいる。そういった方々と歩きに行つて評価してもらう。本当に難しいことは何も考えず、歩くことが本当に好きだ。歩くことを本当に楽しみたいという方も会員にはたくさんいる。ですからそういう中での情報というかやりとりというのが続いてきた形じゃないかなと思っています。

「歩くことを楽しめる」人たちを増やすことがフットパスにのみならず、オルレやロングトレイルにもつながると考えています。ガイドがなければ歩かない、自然がなければ歩かな

い、地域とつながらなければ歩かない、ではなく「歩くこと自体を楽しみましょう」ということを一番重視しています。作る側の方々にはいくらコースが増えても魅力のない「道」では歩きたくないので、ガイドや見どころを取り入れるのもいいですが、「道」自体をよく選定して欲しいとお伝えします。そうすることで作り手の思いと歩き手の思いの交差点が近づくと 생각합니다。

中村純子

ありがとうございます。昨日から聞いていて思うのは、交通革命によって非常にスピードが増して風景が変わってきて、観光文化が醸成したり、文化社会の熟成によって社会も経済も変質する中で、ようやくこういったスピードをゆるめたものの楽しさ、必要性が感じられたのではないかとことです。そういったことで、6段階目のところに行けば、もしかしたら間宮林蔵につながるのではないかと感じて、きっと宮本常一先生も喜ぶかと思います。

北海道はアーバンとルーラルの中で札幌を活かしている。もしかしたら、春になったら「ジンパ」の風景とかもフットパスに入るのではないかとこのと、やはり北海道は食というのが非常に重要視されていると思います。

そこで祖父江孝男先生の本や現在テレビ番組でやっているように、「道民性」とか県民性に関する質問として、「道民性」が活かされているフットパスがあると思うので、そういった「道民」という立場、日本の中で北海道ならではのフットパスというのを教えていただきたいのが一つ目です。

もう一つが(北海道は)アイヌの方々もいますので、平取などを含めたところのフットパスが先ほど出ていたのですが、こういったところで文化の共同性をどういう風になっているのか、途上でもいいので教えていただきたいと思います。

小川浩一郎

まず、答えやすい方から。アイヌの方たちとの文化交流とかは平取や白老では特にアイヌの人が多くて、FNHでは今日ご紹介しきれなかったんですけども、やっぱり記念館があったり、その学芸館の人たちもいるので、そこをうまく知ってもらうのも手のひとつだよねと最初から考えながらやっていますし、あるいは大きな箱物のところだけじゃなくて、地域に昔から住んでいるアイヌの長老の人たちにシマフクロウというすごい有名な珍しいのの講座とかを長老に聞いたりそういうのも組み込みながらそういう活動をさせてもらっています。

道民性が色濃く出たフットパスというのか、北海道らしいフットパスというのは、景観の部分かなと思うんですね。例えば、根室のフットパスだと自然景観がかなりイギリスに近い物がありますので、そういったところを重視しながら作っている。もちろん、文化的景観を利用しているフットパスもあります。

あとは、北海道らしいといえば、南幌町とかも一大農業地帯で大規模な畑や田んぼのあぜ道を歩いたり、冬は田んぼのど真ん中をかんじきで歩けたり、そういうところは特徴かなと思います。僕は、内地にはない雪の中を歩くということができるので、そういうところも全面的に押し出していけたらと思いながらやっています。

西山徳明

どうもありがとうございました。少し時間があります。ちょっと私から突然ですが、今、アイヌの話がありましたが、吉原さんに今日来ていただいているので、少しフットパスやトレイルの話と平取での取り組みについて、あるいは、吉岡さんご自身のコメントをいただければと思います。

吉原秀喜

今、「途上」とのお話がありましたが、本当に途上で、始まったばかりというか。途中のお話の中でもありましたが、アイヌの人たちの歴史はやはり丁寧に見ますと大変なことが多かったと思うんですね。ですので、環境も景観も、あるいは人の心も痛んでしまっているのは否めません。

私たち平取町というところは、まちとしてアイヌ関連の施策に力を入れています。特に私が担当しているのは、そういうダメージを受けたところを、ケアするというか、手当するというか、そういう役割も担っています。文化環境対策保全事業というのに取り組んでいます。勤めているところがアイヌ文化の環境保全対策室という、今、言いましたように、環境も景観も扱っていますが、何よりも人の心のケアがけっこう大きい。どういう風に歴史や文化、自分たちの伝統を受けとめているか、受けとめるべきかと、そういう取組にならざるを得ない面があり、まさにその作業をやっているということになります。有形のものも、精神文化も、両方をケアし、つなげながらの取組だということです。

そういう意味で途上であり、ケアをしつつ、閉じたものではなく、できるだけオープンな関係を築く。外からも来ていただけることが、自分たちのコミュニティのプラスにもなるように、ということで心がけてやっています。

できるだけたくさんの方に、急がない、歩きのペースで来ていただく。ツアーをやると、自分も実際には初めて、というような試験的なプログラムになることが多いのです。今までアイヌ文化保全対策室というところで、十数人のスタッフとともに、環境に関わるアセスメントとミティゲーションを融合させたような仕事をやってきました。スタッフと共にした調査の結果を生かしながら、こういうツアーをすると自分たちのことがよく分かっていただけののでは、というような観点でプログラムを組み立てて、やってみる。何よりも取り組んだ側にとってはどうだったかというような点を重視し、総括点にする、そんなことでテストを積み重ねているというところ です。

西山先生にも参加者になっていただいて、エチオピアから来られた方々にもご参加いた

だき、「ミステリーツアー」だと言いながら、アイヌの文化遺産と自然にふれるツアーを行い、分担してガイドをしました。参加者からアドバイスをいただくということもありました。そういう積み重ねを、ようやくに始めたばかりなんですね。

小川さんとは今まで、お父さんの方としか接点がなかったのです。先ほどおっしゃっていたのは、文化的景観の関係での流れなんですね。多種多様なツアーを熱心に取り組んで来られましたね。啓発のツアーを、実に数多くやっています。そういう流れの中で、ノーザンクロスという会社の柳さんとの関係だと思うんですけども。そこには地元の方にも参加していただく。分かっていたことなんだけど、さまざまな理由で表現しにくかったことを、ツアーを機会にカタチにする。思い切って表現するきっかけになるわけです。いままでになかった心の動きを引き出す、自他共にとても効果的な機会として、ツアーはあるというのが実感です。

もう一つ、例えばシマフクロウ。それ自体が、とてもたいせつな存在として伝承されてきたものです。希少種ですが、どうも日高、平取町にはいるらしい。そんなことで守っていきこうという動きが強まっているということもある。いろんな素材を発掘しながら、自らに問いかけ、活かす。ツアーを行いながら、ケアもしながら、個人としても、コミュニティとしても、まずは地力を付けていきこうという取組が続いています。

そんな中でフットパスというのは、とても有効なツールだと理解が広がりつつあります。環境・景観へのダメージを回避するとか、心のケアにつながるとか、来ていただいた人たちだけでなく双方が学べるとか、環境保全の対策について考え、そのための作業を一緒にするとか、そうした可能性を多様に含んだ取組として期待し、まだ本格的に始めたばかりの途上にあるという状況です。

西山徳明

すみません、急なお願いで。ありがとうございました。フットパスというと、普通にツアーバスで来て、何十分したら出発の用意をしてくださいという時間感覚と、多分フットパスで消費されて使っていく時間感覚とは違うと思います。今吉原さんが取り組まれている、北海道とあるいは海外のどこかとの交流、外の方とをつなぐというリンケージというのは私は大事なんじゃないかと思います。どう進めるかについて、中村先生のご質問に関連して吉原さんにお話しいただきました。どうも申し訳ございません。



1. さっぽろ周回ウォークウェイのルート。荒井山



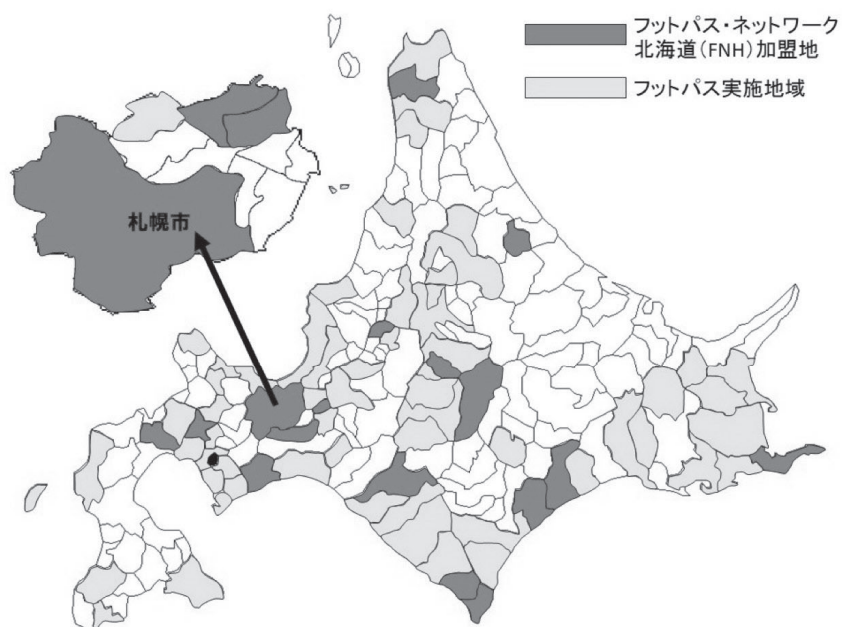
2. ランブラーズ協会のミルズさんも参加した
フットパス国際フォーラムin黒松内



3. 第26回全道フットパスの集いinニセコ 交流会



4. 2014全国フットパスフォーラムinかみふらの
2014.9.20(土)～21(日)



5. 北海道内のフットパス実施地域



6. 北海道のフットパス統一コースサイン



7. ルート上で設定された統一コースサイン



8. 名物のキャベツキムチづくり体験



9. 歩きながらビールや地域の食材を楽しむ臨時パブ



10. 農家に立ち寄り直接食材を購入する（黒松内町）



11. 藍染め体験も楽しめる太平百合が原フットパス



12. フットパスでお世話になっている有機の田んぼで
雑草除去ボランティア（南幌町）